一

次の文を読んで、あとの問に答えよ。（五〇点）

現代社会において、芸術という観念がすでに変化したとは断定できないが、変化の兆候はかなり顕著にあらわれている。芸術に固有と考えられる若干の属性が、疑問の対象とされていることは否定できない。

芸術は永遠につらなるものとされた。果してそうであろうか。芸術を創作し、これを享受するのは人間である。今日では全人類が地上から絶滅する可能性がたしかにあるが、もしそうなれば、芸術も当然消滅してしまう。しかし、そのような芸術の全般的消滅という想定も、日本では、あまり強い衝撃をあたえないかも知れない。よきも悪しきも、あらゆるものは必ず滅びるという思想が、ここでは根強いからである。全的消滅の問題ははずすとしても、芸術の価値は永遠不変だという観念はどうであろうか。『ミロのヴィナス』の美しさや『万葉集』の真実性は、いかなる時代にも評価されるという命題は、安全に成り立つであろうか。疑わしい。未来は予測できないにしても、過去の考察から想定をこころみることはできよう。新井白石は全裸のギリシア女神像を見て、おそらく喜ばなかったであろう。ラシーヌが『万葉集』の東歌（あずまうた）を愛唱したかどうかは疑わしい。たしかなことは、『赤と黒』が文化・文政期に邦訳されたとしたならば、きっと訳者は手錠をはめられただろうことである。現にこの傑作は、制作当時、著者の親友で、頭脳明敏をもって知られたメリメの評価をすら得ることができなかったのである。

芸術の時間・空間に制約されない普遍妥当性という観念は、観念的美学者にとっては好都合であろうが、簡単には容認しがたい。もちろん、地球の各地域が孤立していた時代と、科学技術の発達によって地球が日々に小さくなっていく現代とでは、事情はもちろん同じではない。アフリカ黒人の彫刻が日本で鑑賞され、宋代の文人画がアメリカで賛美されるという事態も生まれつつある。しかし、外的破壊によるのみでなく、好尚の変遷によって消滅した（ギリシア劇）あるいは消滅しつつある芸術もあるのである。一中（いっちゅう）、薗八（そのはち）といった江戸音曲は、いつまで日本青年の心をつかみうるのであろうか。世界中の文化が均一化される方向が生じつつあることは疑いえないが、均一化のさいに主流となるものと傍流となるものとは避けられず、置き

ざりにされて亡びるものも生じるはずである。主流として生き残ったものを永遠不変というのであろうか。

社会条件がどのように変わろうとも、すぐれた芸術の価値の不動であることは親子の情と同じであるなどという議論を今もときどき聞くが、それは自然の永遠不変性をふまえての感情論にすぎない。ところで(1)自然そのものが漸次歴史化されつつある。そして自然のなかへ人為が乱入して、これに改変を強制するのが工業ということではないか。自然は上等、ホンモノ、人造は安物、ニセモノという考え方は、工業発達の初期の感じ方にすぎない。今日、人造ゴムがあらゆる点において天然ゴムにまさることは証明されている。外界自然にしても、人間が管理しなければ、破壊しつくされるところまできている。永遠不変ということばを使うのは、慎重でありたい。

従来の芸術という観念には、つねに個我という観念が強く含まれていた。芸術とは、卓越した個我が、その主観的生命を客体化することと考えられていた。しかし、芸術家の天才的個我に力点をかけるのは、ヨーロッパ近代に独特な考え方ではなかろうか。人類の長い歴史において、いわばそれは、短い幸福な時期に栄えた一つの芸術観にすぎぬのではなかろうか。すぐれた芸術品がここにある。しかし、作者はわからない。だが、美しければ、それでよいではないか、という志賀直哉の夢殿の観音についてのことばが、ここで想起される。(2)芸術は、社会と自己とのあいだにさけ目を自覚する孤独の天才のいとなみであるよりも、天才をも含みつつ、多くの協力者によって成就された共同制作であった時代のほうが、長いのではなかろうか。もちろん、ダンテや杜甫は、代作者や協力者をもってはいなかった。しかし、彼の属する社会集団の共通意識から、とくに自己を切り離そうと思ってはいなかったであろう。共通的なものを美しく磨こうという気持はもちろんあっただろうが。また、文学をもって芸術全般の代表ジャンルとは考えてはなるまい。

科学技術の発達に伴って生まれた新しい芸術のジャンルは、共同制作的性格をその誕生のときからもっていた——映画、ラジオ、テレビ。これらのものを芸術と認めない人もまだあるが、それは少数化した。嫌いな芸術とは言えても非芸術とは言いがたい。

「オリジナル」ということばは、「独創的」と同時に、「もとのもの」（コピーでなくホンモノ）という二つの意味をもってい

た。古い芸術の観念においては、芸術品とは、世のなかにたった一つのもの、ユニークなもの、かけ替えがなくて貴いもの、という語感を含んでいた。これも、今日、もはやそのままでは、私たちの現実感覚に適合しないのではなかろうか。芸術は、その本性上、独創的であるべきことは当然として、その独創が必ず個我の独創性でなければならぬという状況は、逓減(ていげん)しつつあるように見うけられる。個我の人格がはっきりするのは、それが社会との対抗関係にあるときであるが、社会に対立する個我という観念は、悲壮ではあるが、いまや少し古風な印象をあたえないであろうか。

「オリジナル」のもう一つのほうの意味は、さらに激しくゆすぶられている。オリジナルに対立するものは複製だが、複製という観念なしに、現代芸術は考えられないところまできている。今日、最も成功した芸術家とは、おのれの作品の複製を最大多数に頒布した人というべきであろう。一つの小説の芸術的価値を、その発行部数の多少をもってはかることはできないにしても、『暗夜行路』は、志賀直哉の原稿か初版本で読まなければならぬという人は、もはや一人もない。映画、レコード、ラジオ、テレビ、写真における芸術作品のオリジナルは、どこにあるか、それをせんさくするのは、好事家ですらない。オリジナルをもたない、全部が複製の芸術が生まれたのだ。絵画、彫刻においても、複製技術の進歩は、オリジナルとの区別をほとんど不可能にするところまできている。西洋画において、油絵具の色彩はもとより厚みまで出す技術が生まれた。そのようにして程よく時代のサビをつけられたルノアールを見て、芸術的陶酔にふけっている人の背中を叩(たた)いて、それは複製ですよ、と言う鑑定職人は、むしろ芸術の敵ではなかろうか。(3)

芸術における稀少性の喪失は、芸術にたいする神秘的、礼拝的基盤を喪失させつつある。新聞や週刊誌に載る小説は、芸術品でないと断定することはできないが、それを満載した週刊誌が文字どおり読み捨てられ、汽車のなかや街路で、泥靴に踏まれているのを見るとき、人は、芸術の永遠性というようなことばを口にするのをちゅうちょするのである。「無用になったら、捨てても燃やしてもいいような芸術、次々と取りかえ可能な芸術、非芸術の芸術、そういうものが生まれてきている」(川添登)。

永遠ということばの感覚化であろうが、従来の意識では、芸術品とは、大理石像が象徴するように、なにか固いものという

感じを含んでいた。しばらくほっておけば、形が変わり、くずれるようなものは、芸術ではない。すぐれた文学作品は、一字一句ゆるがすことはできない。つまり芸術品には持続耐久性があり、それが固いと意識されたのだ。ところが、たとえば一ショット、一ショットが感動をよぶ『真昼の決闘』（ジンネマン）が終わって、場内に灯がつけば、この傑作は私の手のとどくどこにもない。そのフィルムは、倉庫にねむっているだけである。すばらしい歌ごえを聞くテレビの合唱とても、同じことであろう。芸術品は私たちにとって柔らかいものとなった。芸術を創作する個我が現代社会の空気に浸透されて、その輪郭がぼやけてきたということもあるだろうが、オリジナルがもはや存在しない、あるいはこれを尊重する人がないという感覚が、芸術品を柔らかく感覚させることになっているのではないか。

芸術の複製をつくるということは、芸術を規格生産することとつらなる。レコードの長さ、複製写真の大きさの型、そうした規格化が、芸術を制作あるいは享受する人間の心の敏感な部分に、影響を及ぼさぬということは考えられない。それはしだいに芸術の享受者をなんらかの形において規格化して、従順な心的態度を知らずしらずのうちに養成しているにちがいない。

芸術品にたいする感覚が、固いものから柔らかいものへと移りつつあるということは、複製芸術があらわれたということと相即して芸術を考える場合に、問題をいわゆる純粋芸術の考察のみですますことができなくなってきたという状況と密接な関係がある。

（桑原武夫「現代社会における芸術」より、一九六九年初出。傍点は原文のまま）

問一　傍線部（1）はどのようなことをいうのか、わかりやすく説明せよ。

問二　傍線部（2）はどのような意味か、わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部（3）について、「鑑定職人」が「むしろ芸術の敵」であるのは何故か、わかりやすく説明せよ。

問四

（イ）著者は、従来の芸術観をどのようなものととらえているか、述べよ。

（ロ）それに対して、著者はどのような立場から「現代社会における芸術」を考えようとしているか、述べよ。

二

次の文を読んで、あとの問に答えよ。（五〇点）

人は喜ばしきをのみ悦ばず、悲しきをも悦ぶと云はば、一見事理に反したることの様なれども、少しく思へば、こは却て常に我らの耳目に触れ、常に我らの経験し居る事実なり。何故小説家はあはれなる話を書き綴つて、読む者に袖ぬらさしめんとする乎。何故婦女子は泣きに芝居の愁嘆場観に行く乎。悲しきこと、わざと語り出でてただ落涙するをば、一つの愉快とする者さへなきにあらず。これ皆畢竟悲哀に幾分の、また特別の快感の添へばなり。世間もし生者必滅、会者定離の嘆きなくんば「あはれ」てふ感情は絶えてなからん。秋の夕をあはれと思ひ、散りゆく花をあはれと見るは、これひとり悲哀の情のみにあらず、その悲哀の情につきまとふ一種の快感の存するあり。世は不如意なることのあるにこそ、また一つの面白味の加はるなれ。(1)「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは」と兼好法師の云ひしはこれが故なり。

余は思ふ。小説もしくは戯曲を読んで可憐なる少女の悲哀に泣くを見て、我もともに泣くときの心の中に言ひ難きの快味を覚ゆるは、これわが社会的の性情を満足せしむるによるならんと。我れ他のために泣くときは、わが狭隘なる窮屈なる利己の圧束を脱して、わが心は人類の大なるが如くに大に、社会の広きが如くに広きを覚ゆ。これわが心の一時の救ひにはあらざる乎。狭隘なる利己の心はこれわが本真の性にあらず。他人のために涙を流して他と我との差別を忘るるのときは、これわが本性の光明を放つの瞬間なり。吾れ人はその本性に復らんことを求む。これ、これによりて(2)仮我を去つて実我を得ればなり。これ真に我に復るなり。かのいはゆる社会的の性情は、すなはちこの復我の一片のみ。詩歌と云ひ、美術と云ひ、皆この大目的に向つて進むものにはあらざる乎。

吾れ人の感覚する悲哀の情がもし道徳的の観念また感情と相団結するとき、もしくはその悲哀の情のあるがためになほ一層道徳的の観念また感情の活力光輝を表はすときは、その悲哀の情は多少(3)道徳的の愉快を来たすの縁由となるべし。例へば高節廉潔の士が堪へ難き艱苦の中にありながら、なほよくその節操を守るの様を観れば、一方には固より悲痛辛酸の状あれども、しかし却てそれあるがためにまた一方には道徳的心識の満足を発揮せしむ。故に悲壮なる戯曲の主人公が正義公道を守つて終

にそれがために非命の死を遂ぐるの様を観るときは、悲痛惨憺（さんたん）の状は固よりこれに過ぐるものはあらざれども、しかれどもその惨憺たるが中にもなほ一種高等なる快感の存するを覚ゆるなり。

人は悲哀に訓練されて真正の楽境（らくきやう）に至るの途（みち）を知る。こは固より人生の悲しき事実（4）に相違なし。しかれどもその事実なるを如何せんや。

（大西祝（はじめ）「悲哀の快感」より）

注　吾れ人＝自分と他人、われわれ。

問一　傍線部（1）の兼好法師の言葉を著者は何を言うために引用しているのか、説明せよ。

問二　傍線部（2）について、「仮我を去つて実我を得る」とはどういう事態を指すのか、分かりやすく説明せよ。

問三　傍線部（3）の「道徳的の愉快」とはどういうことか、説明せよ。

問四　傍線部（4）について、著者はこの事実をなぜ「悲しい」と言うのか、分かりやすく説明せよ。

問五　この文章全体の論旨を二四〇字以内（句読点を含む）にまとめよ。

三

次の文は『住吉物語』の一節である。女主人公の姫は、事情があり、心ならずも父中納言の家を出奔して摂津の住吉に隠れ住み、彼女を片恋する男主人公の中将は、彼女の行方を神仏に祈って捜している。話は、従者たちをともなって初瀬（長谷寺）に参籠した男主人公が、暁がたに霊夢を得るところに始まる。これを読んで、あとの問に答えよ。（五〇点）

春秋過ぎて、九月ばかりに初瀬に籠りて、七日といふ、夜もすがら行ひて、暁がたに少しまどろみたる夢に、(1)やんごとなき女、そばむきて居たり。さし寄りて見れば、我が思ふ人なり。嬉しさ、せんかたなくて、(A)「いづくにおはしますにか、かくいみじきめを見せ給ふぞ。いかばかりか思ひ嘆くと知り給へる」と言へば、うち泣きて、「かくまでとは思はざりしを。いとあはれにぞ」と言ひて、「今は帰りなん」と言へば、袖をひかへて、(2)「おはしましどころ、知らせさせ給へ」とのたまへば、

わたつ海のそことも知らず侘びぬれば住吉とこそ海人は言ひけれ

と言ひて、立つをひかへて返さずと見て、うちおどろきて、夢と知りせばと、悲しかりけり。

さて、「仏の御しるしぞ」とて、夜の中に出でて、「住吉といふ所、尋ねみん」とて、御供なるものに、「精進のついでに、天王寺、住吉などに参らんと思ふなり。をのをの帰りて、この由を申せ」と仰せられければ、「いかに御供の人なくては侍るべき。捨て参らせて参りたらんに、よき事さぶらひなんや」と慕ひあひけれども、(B)「示現をかうぶりたれば、そのままになむ。ことさらに、思ふやうあり。言はんままにてあるべし。いかに言ふとも、具すまじきぞ」とて、御随身一人ばかりを具して、浄衣のなへらかなるに、薄色の衣に白き単着て、藁沓、脛巾して、竜田山越え行き、隠れ給ひにければ、聞こえわづらひて、御供のものは帰りにけり。

注　捨て参らせて参りたらんに＝お供申し上げずに邸に帰参したなら、の意。
　　示現＝神仏が霊験を示すこと。お告げ。

問一　傍線部（1）（2）を現代語訳せよ。

問二　傍線部（A）（B）を、適当に言葉を補いながら現代語訳せよ。

問三　文中の和歌を、その技法に留意しながら解釈せよ。

問四　波線部を、適当に言葉を補いながら現代語訳せよ。なお、「夢と知りせば」は「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」という古歌を踏まえた表現である。

問題は、このページで終わりである。